

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 今井 亮一

本論文は、中上健次の作品の特徴と創作方法の変遷について、近年特に欧米で飛躍的に進展しつつある世界文学論および翻訳研究の知見を活用して分析したものである。参照される主な理論的著作は、ダムロッシュ『世界文学とは何か』、モレッティ『遠読』、アプター『翻訳地帯』、そして研究者集団ウォリック・リサーチ・コレクティブの『結合され不均衡な発展』などである。

第1章は、中上の初期作品「岬」と『枯木灘』を精読し、「岬」では「父殺し」と並んで「母殺し」の要素も強かったのが、『枯木灘』において「父殺し」が前景化し、「路地」の作家としての中上の自己像が固まったことを明らかにする。そして中上にとって父を乗り越えることが、強い影響を受けたアメリカ作家フォークナーを乗り越えることを意味したことが論じられる。

第2章では、エミリー・アプターによる翻訳論を援用しながら、『紀州 木の国・根の国物語』『千年の愉楽』『熊野集』などの中期作品に焦点を合わせる。今井氏によれば、中上は単一言語と見られがちな日本語の中に、話し言葉と書き言葉という二つの「一致し難い」言語を見出していた。中上にとって小説を書くことは、このような複数言語状況の中で話し言葉を書き言葉に「翻訳」する営為に他ならない。

第3章は『地の果て 至上の時』、第4章は『日輪の翼』と『讃歌』を取り上げ、資本主義の発達と中上作品の出発点であった「路地」の解体がその背景にあることを論じ、その際に、ウォリック・リサーチ・コレクティブによる世界文学論を応用する。この研究者集団は、資本主義による近代化の結果、世界に中心／周縁が混在した不均衡な状態が生じ、資本主義と土着文化の衝突の結果、周縁に非リアリズム文学が生まれると主張するのだが、今井氏はその理論的枠組みを使って中上文学の特質と変遷を説明する。そしてフォークナーを先駆者とし、特に南米の作家たちが発展させた「グローバル・サウス」の文学に中上がつながると論証する。

終章(第5章)は未完に終わった長編『異族』に即して、世界文学論の観点から中上の創作の到達点と限界を指摘し、グローバル・サウスの連帯が容易には実現できない、歴史的な対立を孕んだ状況こそが世界文学が直面する現実であると論を結ぶ。

本論文は、中上作品のほぼ全体を緻密に読解することに加えて、日本語・英語の参考文献を博捜し、現代欧米の世界文学論・翻訳研究を効果的に活用し、日本文学だけの枠組みの中では見えにくい中上文学の特質を明確に示すことに成功した。世界文学論の適用にはまだ作業仮説的な面もあり、比較文学やナショナリズムと世界文学論の関係についてはさらに議論を掘り下げ、精密にすることが必要だが、中上文学への新たなアプローチを鮮やかに切り開く、独創的な研究として高く評価できる。よって審査委員会は全員一致で、本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいとの結論に至った。